

（梶矢さんに教えて頂いた話）
 十八世紀末ごろ、平地の少ない熊野村では、農業だけでは生活が苦しく、奈良地方から筆や墨を仕入れて出稼ぎや行商をして生計を立てていました。これがきっかけで筆と熊野の結びつきが生まれました。（毛利元就の時代に宮島の社領が5000石ほどあり、そのうちの545石が熊野の村でした。これが宮島と熊野のつながりです。）

歴史

周囲を山に囲まれた農地が少ない町



熊野町は周囲を山に囲まれた小さな盆地。そのため、農地が少なく、農業だけでは生計を立てられない人も多かった。

出稼ぎで筆や墨が身近なものに



江戸時代末期、熊野町の人たちは、農業の閑散期に紀州熊野などへ出稼ぎへ。筆や墨を仕入れ、それを売りながら熊野町へ帰る人も！

筆づくりの技術が町全体に広がる



技術を習得した人が熊野町でも筆づくりを始める。そのころ主な産業がなかった熊野町では、筆づくりという産業が受け入れられる。

周囲を山で囲まれ、他の産業がなかなか入ってこなかったこともあり、筆づくりの技術が町全体で磨かれていった。

国内の筆の8割を生産する「筆の都」に



現在では、書筆、画筆、化粧筆のいずれも全国一の生産量を誇る産地となった。熊野町に住む10人に1人が筆に関わる仕事についている。

梶矢祥弘さんについて

梶矢さんは、郷土史研究会の方です。榊山神社の宮司である梶山さんにご紹介いただきました。熊野のことについてよく知っている生き字引のような方です。私たちは梶矢さんから、熊野町や組曲のことについて、たくさん教えていただきました。そして、今年の組曲をより良いものにするため、工夫してきました。

passion 限界に向かって

突き進め🔥



熊野町立熊野中学校
 組曲「筆の都 くまの」
 第23代目

踊りパート



今回、私たち踊りパートは、熊野中学校で行っている踊りを中心に探究しましたが、解決することができませんでした。そこで私達が受け継いできた踊りの意味を自分たちで考えました。その意味を知ってもらい、熊野中学校の組曲をより知っていただきたいと思っております。



地づき唄

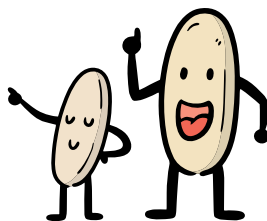
地づきうたの手を横に広げる動きが豊作を守るかかしを表現していると考えました。



この動作が稲を刈る動きに似ていたので、稲を刈っている動きだと思いました。

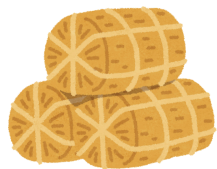


3回拍手する動きは米の豊作を願っていると考えました。

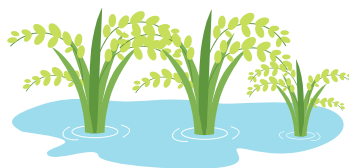


神楽踊り

担ぐ動きは米俵を担いでいると考えました。



神楽踊りの腕を伸ばした流れるような手の動きは、田んぼで水が流れている様子を表していると考えました。



神楽踊りの腕を上押し上げるような動きは米が育っている様子を表していると考えました。



衣装



踊りの衣装は白を基調としています。後ろの帯はいろいろな色があってとても魅力的で動くときにヒラヒラするところもとても可愛いです。

踊りの構成

組曲は2楽章構成

第2楽章：神楽踊り

第3楽章：地づき唄

※神楽踊りについて

- ①昔、熊野と関係の深かった宮島で、毛利元就が陶晴賢に勝利した巖島の合戦の翌年より踊り継がれ、榊山神社で踊られていた盆踊り
- ②「農民の至宝ともいふべき牛が多く死に、また田畑を荒らす虫害が激しかったため撲滅の祈願祭を行い、その祈願ほどきとして神楽踊りを奉納した」とされている。